嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第24号／１９９３年（平成５年）３月発行（年３回発行）
・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1－30－9（〒156）
TEL 03－3426－2323
・発行人＝石井哲夫　・編集人＝友田篤

施設の相互交流と高齢者福祉について

星　哲夫

千葉県君津地区（木更津市・君津市・富津市・袖ケ浦市）に「老人福祉施設連絡協議会」が発足したのは平成元年のことでした。現在、１１施設がメンバーです。公立・民間を合わせて、養護老人ホーム２施設、特別養護老人ホーム８施設、ケアハウス１施設で、併設の在宅老人福祉サービス活動は市町村が実施主体ですので受諾状況は各施設一様ではありません。

県の100施設を越える「老施協」と違って各施設が積極的に役割分担をして活動しています。そうしなければ、会は発足しました、誰かがやってくれるだろうでは停滞し、消滅してしまいます。

確かに、新・旧施設で抱えている問題に違いはあります。「施設の社会化」「施設機能の開放」「地域福祉活動の展開」が叫ばれて久しく、施設の孤立性、閉鎖性から脱却し、まして、諸問題を共有してまとまっていくには、各施設に認識と努力が求められます。

平成２年、いわゆる在宅老人福祉サービスの三本柱（ホームヘルパー・ショートスティ・デイサービス）であるショートスティについて話題になりました。特別養護老人ホームはショートスティ用のベッドを少ない施設で２ベッド、多い施設で２０ベッドを持っています。８施設で合計４６ベッドがあります。年間の利用率は１６％です。どこに問題があるのか検討しました。利用者がいないのか、制度を知らないのか、制度が利用しにくいのか等々でてきました。

全国でもまれだった「ショートスティ利用券方式」を検討することになり、山口県等の施設に問い合わせたりして資料を収集し、検討会を重ねました。

協議会発足と同時に会主催で四市の高齢者福祉主管課と施設の合同会議を持っていましたので、「ショートスティ利用券方式」を提案しましたところ、四市の高齢者福祉主管課と合同（行政・施設）で検討することになりました。実現にむけて、行政側の準備、施設側の準備と１年かけて検討し、平成３年４月から千葉県で始めての方式を君津地区四市が実施しました。

従来は利用の都度市役所に足を運び申請書を提出し許可書がでて利用するという具合で利用者にとっては利用しにくい制度になっていましたのを１年間有効の「利用券」を発行することによって、その都度市役所に出向かなくても、直接、施設に申し込む制度にしましたところ利用率は前年度の倍以上になりました。

特筆すべきことは、各市、市内の施設と委託契約をしていましたが、四市と８施設が委託契約を結び、地区にあるショートスティ用４６ベッドの有効活用をはかったことです。（全国的にも例がないと聞く）

手前味噌になりますが、県内で地区に協議会を設けているところはなく、施設は施設で同一市町村内にある施設と交流もないところで、広域で交流しようとしても誰が音頭をとってどうまとめていくか並大抵のことではありません。既にできている協議会に加入していくのは易いが、必要性は分かっていても、創設するのは大変なことです。ましてや維持していくことを考えるとどうしても尻込みしてしまいます。

市町村行政は支庁単位で絶えず連絡会を持って情報交換をしています。施設も同一市町村にある施設と交流しなおかつ、広域圏で交流を図っていかなければ、「在宅福祉」「施設福祉」の展開は困難になるものと思われます。

御承知のとおり、法律の改正があり福祉は市町村が実施主体となり本年４月から町村に入所の措置権が委譲されます。「在宅福祉サービス」と同様に「施設福祉サービス」も市町村行政の責任になってきます。

行政と施設が一体となって、高齢者福祉サービスを推進していかなければならない状況の中で、広域的な施設側の窓口（君津地区老人福祉施設連絡協議会）を設立した意義は大きいと考えています。

（袖ケ浦菜の花苑施設長）

施設経営の創造性（その十五）

石井哲夫

民間社会福祉施設には、財産の維持と形成という資本主義社会の麻薬的要素があるという事を否めない。それが社会福祉施設に関わる施設長の施設経営における私物化と関係している。社会福祉研究者や行政関係者においては、施設長や法人理事長の社会福祉施設に関する私物化という事に関して、とかく非難する向きがあるが、民間社会福祉事業の活力こそこの施設長の私物化と関係が深いと考えて良いと思っている。私物化ということばがおかしな響きを感じさせるというなら自我包摂というべきかも知れない。「この施設が自分の物であり、施設に関することは、全てが自分のことだ」と気張る事によって、社会福祉施設経営の意欲や責任感が育つと考えるのである。しかも自我が施設に及ぶ事によって、その人の情緒的な活力が働くのである。施設が自分の財産だと思うから大切に考えるしこれを増やそうとするのである。いくら社会福祉法人という公的な性格があるといってもそこには、利用者のために最善のサービスを提供する事業体の経営性を問題にすべきであって、公的な物事を個人の財産的な私物視するともそれを個人のために消費するのではなくよいサービスを提供する原動力となれば良いのであり、行政は、細かいことを気にしないで、その施設運営の営みの評価をキチンと行えば良いのである。

当節のように労働時間の短縮が行われるようになり、仕事と私生活のバランスが徐々に変わり私生活の意味が大きくなってくると、施設職員も私生活により大きなエネルギーを注ぐ事になり、仕事の生活にあまりエネルギーを注がなくなってきた。そこに社会福祉の仕事といえども一般企業と同じ様なサラリーマン的な仕事の仕方をするような人が増えてきたのである。いや、むしろ社会福祉の仕事は対人援助の仕事だけに多くの煩わしさがあり、関係職員達は、そこから逃れようとする傾向が生じてくるのである。そのような傾向からむしろ一般企業に働く人の方に愛社精神や、仕事の専門性に誇りを感じていく人が多いという事になるのであろうか。本来社会福祉においてこそ社会福祉精神を求めても良いと思うのであるが、少しおかしくなってきていると思うのである。

最近は、社会福祉施設には、一般企業より安易な素人の就職が行われているから、この際思い切って、あまり専門的な人を集めると言うより、誰でも多くの人を受け入れてファミリーレストランのようなマニュアル式の職員訓練を行ってみたら良いという人もいる。これも試みる価値があると思っている。

それにしても、社会福祉施設のボランタリズムは、どうなっているのであろうか、私は、元来博愛主義とか慈善のような善行を行う人についてあまり信用していないので、社会福祉を貴い仕事などとは思っていない。ただ夢中になれる楽しさや切迫した気持ちで暮らしてきたので、今の社会福祉施設で働く人の気持ちがよく分かっていないのかも知れない。人間相手の仕事の面白さこそ他には見いだせないものと思うし、専門的というか学ばなければ良くできないという奥深い研鑽に関しての魅力を感じているのである。この魅力を追求していくことこそ社会事業精神ではないかと思っているのである。そして、この魅力は、前述した社会福祉施設の私物化と大いに関係があるところで「余人をもっては変え難い」という自負心によって支えられる社会福祉施設経営の創造性なのである。

職員の研修についても自分が究めてきた対人援助の考えや、実践に関する技法に関して、ぜひともよく学んで欲しいという「伝承の心」によって、職員の連携や、アイデンティティが育ってくるのであろう。この頃主任クラスの人達や、私のところから独立していった人達の様子を見るにつけて、これは、私が育てたことだという胸膨らむ思いがするのである。これも一種の私物化なのであろう。

私物化と言う言葉にいささかこだわってきた思いがするが、この世で自分のものと思って、愛着をもったとしてもほんの短い期間の事でやがて全てに別れを告げなければならないのである。とすれば良い結果をもたらす事としてめくじらを立てずに大目にみたらどうであろうか。私は、むしろ私物化を奨励したいくらいである。

私たちのしごと

須藤福祉センター各事業所からの報告

袖ヶ浦事務局便り

春原一道

袖ヶ浦のびろ学園と袖ヶ浦ひかりの学園では、一〇〇名の利用者と九〇名の指導員、保母、調理員、環境整備などのスタッフがともに生活しています。そのなかにあって施設業務の一端を支えているのが五人のスタッフからなる事務局です。

石井所長は、事務職員もソーシャルワーカーとしての研鑽を積むよう指示され、私たちもそれに応えられるよう努力しなければなりません。そして、社会福祉法人嬉泉の施設を利用されるかたが質の高い福祉サービスを受けられるよう、受付、経理、庶務、広報、営繕などを通じて施設を支える役割をになっているといえます。

今回は、特に受付業務と地域との関わりについて書かせていただこうと思います。

受付は学園の顔といえます。学園にみえる方々に親切かつ的確に応対することが求められますし、福祉サービスを必要とする方々が安心して学園を利用できるようきめこまやかな配慮が必要です。電話等でよせられる様々なニーズに対して、良く理解し相手の立場に立ったサービスが提供できるよう応対することが求められます。

また、指導の現場と家族の方々との連絡、学園内部の情報の交換に深く関わり、情報のキーステーションとして円滑に機能しなければなりません。学園が施設利用者や地域に向けて社会福祉サービスを展開して行く上で受付の役割は大変重要だといえます。

袖ヶ浦のびろ学園は、袖ヶ浦に建設されて一六年になります。社会福祉施設は、地域社会に支えられていますし、同時に施設の専門機能を地域の福祉ニーズに生かしていくことも今後の課題になると思います。地域とのお付き合いや、施設利用者の実習などの機会が増えてくるなかで、指導の先生方とよりよきチームワークを築きながら、利用者の方々の社会参加を進める支援をしていきたいと考えております。また、今後地域福祉のニーズが高まる中、社会福祉施設が長年培った福祉臨床などの専門機能を地域社会に広め幸福な社会への積極的な貢献を求められてくるものと考えられます。益々、地域との繋がりが大切になり、そうしたことを踏まえた福祉施設の運営が意味を帯びてくるものと思います。事務局では、そうしたニーズを把握し、学園の事業のなかでの具体化を支援していくことや、社会参加のための地域とのよりよい関係づくり、利用者の方へのよりよい住環境づくり、そして施設で働くひとびとの明るい職場づくりなど多くの課題を抱えていますが、それぞれの持ち場で地道な努力をしています。

そして、常に利用者の方への暖かい援助を実践する石井所長以下スタッフに気持ちを合わせ、法人に関わるすべての人々と協力の輪を広げながら嬉泉の理念に向かって仕事を展開して行けるよう念じております。

（袖ヶ浦のびろ学園書記）

職員の思い

停滞しながらも願うこと

船山　昭信

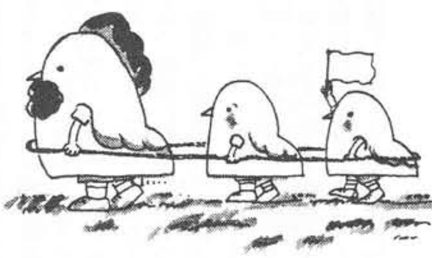
四月になると就職して十年目になります。いつもおんぶばかりしていた子供さんが、見上げるほど大きくなりました。自分はといえば、相変わらずむきになって怒ったり、得意になったり、落ち込んだり、成長のかけらもありません。自信がなくて投げ出したくなったことも幾度となくありました。

実際、昨年度は調子を崩し、現場を離れ厨房の手伝いをしました。もう二度と、という思いもありました。それでも、カウンター越しに子供さんを見ていると、触れてみたくて仕方がありませんでした。

今、何気ない日常の中で、「船山せんせい」と言って、或いは無言で、頼りにしてくれる子供達がいます。自分は、そんなことだけでなんだか嬉しくなってしまいます。自分の能力からいって、上手な指導なんてできないかもしれない。でも、一緒に御飯を食べて、お風呂に入って、泣いたりおこったりしながら、互いに成長できたらと思っています。

停滞しながらも長く続けることは、あながち無意味なことではないと信じたいです。

（袖ヶ浦のびろ学園指導員）



友だち

「前向きの努力」で

矢沢　恭子

前回のこの欄に、同期で仲良しの望さんが「職員の思い」を書いていたんですが、望さんから「原稿を書くように言われたんだ」と聞いた時、「もし自分にその依頼が来てしまったらどうしよう。何を書くだろう」と思っていたら次に回ってきてしまいました。四年目にもなると、新人の頃の新鮮な気持ちや目標が失われて「思い」と言われても本当に困っているんですが、最近、ある事をきっかけに今年の目標を決めたので、それを書こうと思います。

それは、新年の年賀状に、大学時代の友人が、「いつも元旦には今年こそは、…と思うのですが…恭ちゃんはどうですか。」ということを書いてきてくれました。新鮮な気持ちで元旦に目標を決めるなんていいことだなと思い考えてみたのですが、すぐには思い浮かびませんでした。丁度そんな時、NHKのドラマの『ひらり』中で、親方がひらりに「人間いい時もあれば悪い時もあるとそう思ってばかりいてはよくない。悪い時は、更に努力して自分に運が向くようにしていかなくては」と言っていて、その言葉が私に言われているように心に響いて、それを思い出しながら浮かんだ目標が、「前向きの努力」でした。仕事では、休まない、ことが自信ですが、それを大切に、壁にぶつかっても常に前向きでいたいと思います。

〈編集部の思い〉

「職員の思い」の欄は「私たちのしごと」として嬉泉の事業所の内容をご紹介する一方で、そこに働く一人一人の職員の思いを率直に述べてもらい掲載してきております。いかなる事業体でも、その仕事を成り立たせているのは職員となる一人一人の「人」です。職業人として、そして一人の人間として共に働く仲間の様々な「思い」を大切にしたいと願うのです。

（友田）

地域に支えられて

嬉泉バザーについて

小池　朗

毎年、嬉泉バザーが近づいてくると、子どもの生活研究所の周りには、嬉泉バザーのポスター、立て看板が目につくようになってきます。これらのポスター、看板は地域の方々のご協力を得て、設置させて頂いてます。

ポスターは、二十日くらい前から掲示を始め、看板は、一週間前をめどに立て始めます。このポスターと看板の設置は、近隣の方々に嬉泉バザーを知ってもらう大きな手段になっています。また、この担当になった職員にとっては、改めて、地域のことを見直すよい機会にもなります。そして、地域の方々と触れ合う機会ともなります。普段からお付き合いのあるところは、快く引き受けて下さいます。あまり馴染みのないようなところでも、毎年、快く引き受けて下さるところがたくさんあります。

設置のお願いに地域を回っていると、その先々でいろいろと声をかけて頂きます。

「もうそんな時期になったんだね」「いつも楽しみにしているよ」と、言われる場合が多いのですが、中には、「勝手に貼っていっていいよ」と言われる場合もあります。しかし、その言葉、ひとつひとつの中にも、嬉泉バザーは、地域にあたたく迎えられているのだと感じられます。

今回は、世田谷区の掲示板も利用させて頂きました。掲示板を利用することで、地域の出張所の方々にも知ってもらうことが出来たと思います。地域の出張所とは、日常的な関係はありませんが、こういった機会を利用して、かかわり合いを持っていくことも大切だと思います。

ポスターや看板の他に、世田谷区の区報や各種新聞を利用して、嬉泉バザーの宣伝は行われます。また、地域に住む方に向けて、新聞の折込広告も利用しています。

その方面でも、嬉泉バザーは、定着してきているようです。

折込広告をお願いした新聞販売店では、話をしていると、「ああ、いつものバザーですね」と言った感じで、今までのことも覚えていて下さいます。こうした点からも、地域に根ざしているという実感が湧いてきます。また、区報や新聞に掲載される前から、「今年のバザーはいつですか」という問い合わせがたくさん入ってきます。この方々は、決して、地域の方ばかりではなく、毎年、楽しみにしていて、遠方から来てくださる方もいます。さらに、問い合わせをしてきて、献品を、間に合うように送って下さる方もいます。

その他にも、例年、献品を下さる方には、バザーの案内状をお送りしているのですが、案内状が届くたびに、献品を下さる方々もいらっしゃいます。宅配便で送って下さる方がほとんどなのですが、近くに住んでいる方は、直接持ってきて下さいます。その中には、卒園生がいたりして、通っていた当時の話をしていったりします。

また、忘れてはならないのが、嬉泉バザー当日の、ご協力です。嬉泉バザーでは、毎年、広報の一環としてやきいも販売を行っています。この販売場所を提供して下さる方もいます。こちらの申し出に対しても、快く受け入れて下さり、感謝しています。

このように、バザー一つを例にとっても、地域との関係は、いろいろとあります。バザーにいらっしゃる方の多くは、嬉泉が、何をしているところか、知らないと思います。年一回、バザーを開くところという意識しかないと思います。ただ、しかしながら、年をおうごとに、私たちのしている仕事への理解が進んでいるのではないでしょうか。地域の方々と、直接、接する度に感じられます。

（子どもの生活研究所）

嬉泉の出来事

〈子どもの生活研究所〉クリスマス会

毎年、十二月には、子どもの生活研究所のクリスマス会が行なわれます。今回は、石井所長扮するサンタクロースが、研究所内を駆け回る、例年通りのクリスマス会が行なわれました。

サンタクロースの衣装を身にまとった石井所長が、プレゼントを配りながら研究所内をくまなく回ります。子どもたちひとりひとり違いはありますが、皆、嬉しそうに、石井所長からプレゼントを受け取っていました。

いつもは、石井所長のサンタクロースを見て、泣きだしてしまう子どももいます。それほど、石井所長のサンタクロースは、リアリティがあるようです。

子どもの生活研究所にとっては、なくてはならないクリスマス会です。次回も、石井所長のサンタクロースの姿を、楽しみにしていたいと思います。

（小池　朗）

日立製作所からの各種寄付

子どもの生活研究所では、日立親切会より、子どものへやとすこやか学園に対して、物品をご寄付いただきました。

今年度は、子どものへやに、エアコン一台・オイルヒーター一台を、すこやか学園に、ガス湯沸器一台を、それぞれいただきました。建物・設備の老朽化が進み、少ない予算の中で、設備の切り替えが思うように進まない現状の中では、とても有難いことでした。昨年度までも、数回に渡り家電品のご寄付をいただいており、今では研究所にはなくてはならない存在と言っても良いくらいです。

今後も、このようなお付き合いを大切にしていきたいと思います。

（小池　朗）

〈袖ヶ浦〉自閉症児治療教育実践講座の開催

「受容的交流療法における療育技法の創造」をテーマに第九回自閉症児治療教育実践講座が、二月五日・六日袖ヶ浦のびろ学園、袖ヶ浦ひかりの学園を会場に、全国から八十名を越える参加者を得て開催されました。プログラムは、シンポジウム「受容的交流療法の実践と課題」石井所長による「受容的交流療法における療育技法の創造」と題した講義、講師としてお迎えしたこども療育相談センター所長片倉信夫、大阪大学人間科学部助教授倉光修両先生に「自閉症児・者の療育について」豊富な臨床経験に基づく示唆に富んだお話をしていただきました。また、シンポジストを務めた袖ヶ浦のびろ学園山根園長、袖ヶ浦ひかりの学園戸屋主任、高島平五丁目福祉園白石主任の発表は、長年にわたる実践に根ざしたもので、受講生から共感をもって受け入れたようでした。

今回も熱心な受講生が多く、「自閉症児・者の療育をめぐって」の質疑応答では、活発な意見交換がなされ、時間の不足を感じさせられるほどでした。発達障害、とりわけ自閉症児・者への援助は、困難な営みであることは言うまでもありません。こうした研修の機会を通じて、自閉症児・者に対する正しい理解と受容的交流療法に従った援助がより一層広まって行くことを願っています。

（中塚博勝）

強度行動障害治療棟の建設

厚生省の新規特別事業として来年度スタートする、強度行動障害者のための治療教育施設が、全国に先駆けて袖ヶ浦ひかりの学園内

に建設されることになり、さる一月二七日晴天に恵まれた中、その地鎮祭が執り行われました。

ここには、強度行動障害と認定された利用者が四名入所し、訓練された専門スタッフにより先駆的研究的な治療教育が試みられます。竣工は三月末、事業は、平成五年度よりスタートすることになりました。

（友田　篤）

地　鎮　祭

〈高島平〉障害者の日の集い

高島平五丁目福祉園は区立民営の施設であり、区の主催する行事にも参加する機会を得ています。障害者の日の集いは、そういった区の主催する行事で、「『障害者の日』を記念し、心身障害者及びその家族、区民の触れ合いの場を提供する」ことが謳われています。

区立文化会館を借り切って、福祉関係の功労者の表彰の後、『動物マジック』を前座にチェリッシュのコンサートが行われました。

『動物マジック』は犬、鳥、猿など様々な動物がマジシャンの帽子からポケットから手先から、次から次へと登場するマジックで、舞台の上はたちまち可愛らしい動物達で一杯になりました。ショーの後に動物に触らせてくれるサービスまであって、我が利用者達も充分楽しんだようです。

さて、メインのチェリッシュのコンサート。歌もおしゃべりもテレビの印象通り、爽やかで明るくて実に楽しい一時でした。

「障害者の日の集い」には様々な障害を持った人達が集まっています。多くの人達は「集い」を楽しんでいたことと思います。しかし、残念なことに、知的に、あるいは身体的に、あるいはその両方において極めて重い障害を持つ私達の利用者にとって、必ずしも快いと感じる人達だけではなく、その場を楽しむ事が出来ない人達も少なくありませんでした。

確かに障害を持った人のすべてが満足できる「集い」と言うものは難しいことです。しかし、敢えて私達の利用者を代弁すれば、「集い」の一員である誰もが楽しむことが出来ることを目指していくべきであると思うのです。私達はそれは可能であると思います。

よりよい「障害者の日の集い」になるように努力したいと思います。

（北川　裕）

「成人の祝い」

『青年の主張』というものがあります。そのこころは、成人を期に自らの志を明らかにする、と同時にその志を実現して行くことが成人の責任であると自覚することだと言えます。

高島平五丁目福祉園では、成人の祝いの中で書道をする計画を立てました。『書』に志を込める、一字を書くことに精一杯の意志を持って関わることを『青年の主張』と位置付けたのです。

他の伝統行事と同様に成人式もショー化される傾向があって、成人としての自覚を問うという厳粛な意味合いが薄れています。職員も「我が園の成人式はショーにしてはいけない！」という主張を持って計画を練ったのです。

本番に向けて日々の指導が行われて行く。肢体に障害があれば、筆を握ることさえままならない。挫けそうになる心と体をどうやって援助して行けばいいのか。字を書くことが理解できない、気持ちを向けてくれない、不安になったり、逃げ出したくなる利用者。練習を通じて、字を書くということを伝え、やればできるという自信を引き出して行く。ごみ箱の中の半紙は指導の証しです。

そして本番。成人を迎える利用者が紹介され、父兄や後輩達の前で書道に挑む。戦う相手は思い通りに動かない自分の手であったり、すぐにめげたり、逃げ出したくなる心であったりします。そこを職員に援助され、叱咤激励されて真剣に字を書き上げて行く。そこに表現されたのは奇麗事ではない青年の意志そのものでありました。

（北川　裕）

ひかりのタイムス
独立第18号

のびろ作業A班
インタビュー
責任者川相豊子氏に聞く

山岸「作業の内容は何ですか。」
川相「中作業は、①市役所の封筒の住所シール貼り②裁縫③フェルトの布使った作品作り④雑巾で乾拭き⑤枕カバーを作る。⑥ガラス拭き⑦洗濯物たたみ⑧布団カバー入れ。外作業は、①ペンキ塗り②芝刈り③畑作り④薪拾い⑤草取り⑥石拾い」
山岸「なぜこんなに、作業が細かく分れているのですか？」
川相「こだわりの強い利用者に、いろんな場面に応じられるようになってもらいたいから。」
山岸「みなさんの作業意欲は？」
川相「たとえば廊下の乾拭きは、大変だけど、職員に励まされながら頑張ってやっている。
　畑作業は、職員がやり方を実演すると、自分でもやれる感じを持つ。自然のゆったりした雰囲気の中でのんびり楽しみながら作業する状況が、利用者には良いと思う。
　シール貼りをやれば、レストランに行けるという設定にしている。一生懸命頑張ってやれば、目的の楽しみを味わえるという事を体得して貰えればと思う。」
山岸「一連の家事指導のねらいは何でしょうか。利用者達は、自分の事は自分でやるという事を認識していると思いますか。」
川相「この指導は、生活の一部であり、生活の自立、自分の事は自分でやるという事がねらい。
　人任せじゃよくないと思う。例えば布団カバーを布団に入れる事をひとつとっても、利用者でも出来るようになった。」
山岸「裁縫指導のねらいは？」
川相「針に糸を通す。これは緊張してやる作業です。普段の生活で大まかに暮らしているので適度に、緊張しながら、出来る題材として選んだ。
　技術的な進歩は、どの利用者もある。気持ちの集中・持続力が養われつつ有る。例えば、点線に、針を刺す気持ちにも、なれず、イラだっていった利用者が、落ち着いて、指示を聞きながら、出来るようになった。
　ひきつれた、縫い方しか出来なかった利用者が仕上げ縫いも手伝えるようになった。」
山岸「草取り・石拾いのねらいは」
川相「状況をわかって、自発的に参加しやすい作業意識確立の為に行う。草取り・石拾いは、大まかな作業で利用者に分かりやすい。そういう意味ではかなりの幅のレベルの利用者が参加出来る。」
山岸「基本的な指導方針は。」
川相「①人と交流する力を養う。②作業能率は主目的としない。まず作業の状況に部分的にでも出来るようになれば自信と意欲が育つ。それを職員が援助する。③生活能力の向上、利用者にとって分かりやすくやる気のおこる提示の仕方で指導する。④指示通り出来るようになれば、自発的意志でやれるようにしたい。⑤現在は、作業能力・意欲がまちまちなので、全員無理なく参加出来るような設定をしているが、今後は、個別の専門性を磨くシステムを取り入れたい。」

インタビュアー
袖ヶ浦ひかりの学園利用者
山岸　裕

（山岸撮影・裁縫）

〈編集後記〉

　ひかりのタイムスは今号から、嬉泉の出来事関係の記事が増えてきたため従来の2ページから1ページにする事になりました。御了承ください。
　今回の特集は、のびろ作業です。担当責任者と相談して表現等を修正して掲載させていただきます。
　ひかりのタイムスでは、原稿を載せる時は、担当責任者に了解を取ってから掲載する事になっています。
（山岸）